

アメデオ・ジオルジ著 (吉田章宏訳)

## 『心理学における現象学的アプローチ

—理論・歴史・方法・実践』 2013 266+21 頁

(The Descriptive Phenomenological Method in Psychology A modified Husserlian in Approach, Duquesne University Press 233-pages, ISBN978-0-8207-0418-0)

大野 精一  
日本教育大学院大学 学校教育研究科

---

私は、学校教育相談に関する一連の基礎的文献研究として、長文の書評の形態ではあるが、下記の文献研究を本研究紀要で発表してきた。

- ①書評 Charles Gelso & Bruce Fretz (2001). Counseling Psychology 2nd ed. Belmont, CA: Thomson Wadsworth, 652 pages, ISBN 0-15-507156-4 (清水里美訳 カウンセリング心理学 2007 ブレーン出版 617 頁 ISBN 978-4-89242-899-9) (教育総合研究第 2 号 日本教育大学院大学研究紀要 155-159, 2009)
- ②書評 Robert D. Putnam. (2000) BOWLING ALONE : The Collapse and Revival of American Community. New York: SIMON & SCHUSTER PAPERBACKS, 541 pages, ISBN-978-0-7432-0304-3 (柴内康文訳 孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生 2006 柏書房 689 頁 ISBN-7601-2903-0) (教育総合研究第 3 号 日本教育大学院大学研究紀要 157-161, 2010)
- ③書評 Michael Sandel. (2009). JUSTICE: What's the Right Thing to Do? PENGUIN BOOKS 2010, 308 pages, ISBN978-0-141-04133-9 (鬼澤 忍訳 これからの「正義」の話をしよう——いまを生き延びるための哲学 2010 早川書房 380 頁 ISBN978-4-15-209131-4) (教育総合研究第 4 号 日本教育大学院大学研究紀要 153-158, 2011)
- ④書評 Donald A. Schön (1983) The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action. Basic Books, 374 pages (ドナルド・A. ショーン著、柳沢 昌一・三輪 建二監訳『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、ISBN-9784902455113) (教育総合研究第 5 号 日本教育大学院大学研究紀要 93-98, 2012 )

- ⑤書評 Sheena Iyenga (2010) *The Art of Choosing* New York, NY: Twelve, 2011 (シーナ・アイエンガー著 (櫻井祐子訳) 『選択の科学—コロンビア大学ビジネススクール特別講義』 文藝春秋 2010年) (教育総合研究第6号 日本教育大学院大学研究紀要 91-94、2013)

本稿もこの一環であり、この文献選択を見れば評者(大野精一)の学校教育相談(スクールカウンセリング、私は *School Counseling Services by Teachers in Japan* として構成)の基礎的な視点や態度が明確に反映しているものと思われる。日本の学校教育相談に関わる実践家や研究者に受け入れられるものとは言い難いかもしれないが、それでも今後の学校教育相談の実践や研究に少しでも資するため何らかの形で今後とも続けていきたいと思っている。書評を正統な研究と認めない日本のアカデミズムに抗議する意味合いもあったが、残念ながら終巻を迎える本研究紀要ではこれが最後のものとなる。そこで今回は私自身の実践史や研究史と重ね合わせもしながら、本書と向き合いたいと思う。客観的な書評とは趣は異なるが、本書を読むことで私の「経験の意味世界」にどんな関わりを持ったかを最後に記すことで今後の私の研究や実践につなげていきたい。このことを通じてお読みいただいた方々にも新しい視点や観点が少しでも具体的にお示しできれば幸いである。

本書の原著書名は「心理学における記述的・現象学的方法—修正されたフッサール(主義)によるアプローチ」であるが、評者の理解では、心理学の諸課題に対して特に記述された資料に基づき原著者によるフッサールの把握(科学的心理学の基準・規準に合致させるための補完や修正も含む現象学的方法)によりその解明をめざしたものである。なお、訳者は「心理学における叙述現象学的方法—修正フッサール流アプローチ」(253頁)としている。訳者が「叙述」と訳したのは記述(書き記す)と口述(陳述)を同時に含みうる訳語(表記)とするためであるが(248-249頁)、評者は口述(陳述)も最終的には記述(書き記す)されうるものと考えた。また評者は寡聞にして「叙述現象学」という言葉に馴染みがなかったので訳し分けることにした。いずれにしてもここで問題になっているのは、広く心理学における現象学的方法である。そして方法である以上は当然にも固有の問いが根底にあり、この問いに対してその方法が適合的でなければならないはずである。本書が論じるテーマは多岐にわたるが、本稿では現象学的方法「問いと方法」に焦点化して本書を紹介する。本書の全体的な構成は下記の通りである。

日本の読者へのご挨拶

まえがき

第1章 概念的枠組み

第2章 心理学的現象を研究するにあたっての質的視点

第3章 研究過程

第4章 科学的現象学的方法とその哲学的脈絡

第5章 現象学的方法

第6章 方法の適用

原注・訳注・やや長い訳者あとがき・文献・事項索引・人名索引

本書の訳者が共訳者として関わったE・キーン(吉田・宮崎訳)『現象学的心理学(原著題・A Primer in Phenomenological Psychology)』(東京大学出版会・1989年9月刊)では本書と共通する問題や課題について次のように述べられている。

心理学の主題は主として私達自身である、と私は考えます。どのような言葉によって、私達は、私達が誰であるかということに、接近できるのでしょうか?行動と情報処理に関する精巧な技術的諸科学は、私達の主題を、世界の一部として「あそこに」位置づけます。私達は、[たしかに]部分的には、そのような対象物[客体]です。しかし、そうである前に、私達は物語を語る人、夢みる人、知覚する人、そして、もろもろの意味を創造する人です。私達は、行動と情報の諸科学が前提としている、世界のあの解釈を、創造してきたのです。世界の中のもろもろの事物のために私達が創造する言葉から余分なところを削り去り、創造そのものと創造者達[である私達自身]に接近することは、私達には、どのようにしたらできるのでしょうか?(日本の読者へのご挨拶 i - ii 頁)

まず第一に問題とされている問いは、本書では「その経験を通して生きるということは、どのようなことであるのか What is it like to live through that experience?」あるいは「心理学的に言って、その人が(その人を)通して生きて経験したことの、基本的な意味は何か What is the basic meaning, psychologically speaking of what the person has lived through?」として整理されている。さらに第二にそれらを解明する方法を基礎づける「最善の接近 the best access (そのための基準あるいは規準 criteria)」が本書の課題となる(訳書71頁:原著p.63、以下同様な出典表記とする)。

第一の問題が必然的な問いになるのは、「心理学の正確で議論の余地のない定義は、未だに、歴史的に達成されていない」(125頁:p.108)にしても少なくとも「基本的には、心理学の焦点は次のことに合わせられる。すなわち、個々の人間主体は、世界をどのように自らに現前させているか、また、その現前化を基礎として、どのように行為するか、である」(155頁:p.135)からだ。だからこそ「心理学的に言って、誤った記憶は、正確な記憶よりも多くを露わにしよう。なぜなら、そうした記憶は、その個人の心理学的生活について、より多くのことを露わにするからである。歪曲化された記憶でさえも、心理学的にはより一層興味深い。なぜなら歪曲は、主観性の働きを露わにするからである。客観的な事実あるいは客観的状况を知るとは、主観的な歪曲に対する対比として役に立つ。しかし、心理学的現実を露わにするのは、後者[主観的歪曲]なのである。こうして、ある対象あるいは出来事が経験者にとってどのように取り上げられてるかということこそが、現象

学的心理学的研究の主題なのである。」(137頁:p.119)ここで問題となっているのは、「実際の現実性 actual reality」や「実際の真実性 actual veridicality」ではなく、対象や出来事その人にとって「どのように現前したか」である(136頁:p.118)。

こうなるともはや仮説-検証アプローチ an hypothesis-testing approach や自然科学の基準・規準 natural science criteria では問いに対する最適な方法とは言えず、全体論的 holistic で発見的アプローチ discovery approach が求められる。これこそ人間科学の基準・規準 human science criteria に基づく現象学的アプローチ phenomenological approach なのである(141、147頁:pp.123,128)。本書は開放性と厳密性を伴うものとしてこの独自のアプローチ(方法)を基礎づけるものであり、さらに具体的なケース(普遍的 universalではなく一般的主張 general claimsとして(223頁 p.196)の嫉妬の叙述解明)に応用してその適切性 adequacy (135頁:p.118)をも実にわかりやすく確証したものである。本稿ではそこに至る道筋を細かく具体的に紹介することはできないが、その結論をまとめた表(82頁:p.71)を次に示す。なお、訳者は解明(explicitation)について訳注を付けて、「explicitation 解明(明示化):明示的でない(implicit)ことを、明示的(explicit)にすること」としている。

表1 自然科学と人間科学のアプローチが優先するところにしたがって、科学研究を具体化するための基準(規準)

自然科学の基準(規準)	人間科学の基準(規準)
実験化(experimentation)	その他の研究様式(other research modes)
量(数量)(quantity)	質(quality)
測定(measurement)	意味(meaning)
分析-総合(analysis-synthesis)	解明(explicitation)
決定された反応(determined reaction)	志向的反応(intentional response)
同一の反復(identical repetition)	変容を通じての同一性(identity through variations)
独立の観察者(independent observer)	参与観察者(participant observer)

上記の表では、総ての背景要因を一定に保った実験により数量を測定し、因果関係を主軸に分析・総合することで決定された反応を語る自然科学の基準(規準)と対比された人間科学の基準(規準)が正面から問題にされる。このことを明確にするために仮に人間を被験者とする場合を想定すると、決定された反応(determined reaction)に対して志向的反応(intentional response)が極めて重要になると原著者は考えている。重要なポイントなので、長い文章であるがそのまま引用する(95頁:pp.82-83)。評者の40年来の疑問はこの文章を精読することで解明に向けて一歩先に進んだことを記しておきたい。

「人間の被験者の場合、実験には総て、被験者に読んで聞かされるべき指示のセットが必要とされる。そうしないで彼らを実験状況に置くなら、その場で自分たちに求められていることを

[それぞれが]推測するがままに任せ、彼らを放任することになってしまう。指示は、実験状況で鍵となる部分に被験者を方向づける。また、参加者が自分たちに何が要求されているのかを理解することを含意する。指示は、被験者が協力的参加者になる原因となるわけではないのである。そうでなくて、彼らは、コミュニケーションと理解可能性を通して、そこで望まれている態度に到達するのである。同様に、被験者がある実験で彼らに課せられた課題に反応する場合、それらの反応は、その課題の意識的な理解に媒介されている。被験者の反応について全面的な因果的説明を求める場合には、意識の役割、あるいはその実験状況の被験者にとっての意味は、無視される。したがって「決定された反応」というのは、不正確な呼び名である。確かに、刺激の効果はある。しかしそれらの効果は、正常な被験者には、決してそれだけで単独に働くことはないのである。むしろ、単純な閾値実験においてさえ、その状況の意味と意識の役割が、その実験結果の妥当な理解にとって決定的なのである。「志向的反応」という表現には、その状況の被験者にとっての意味が、そこで起こっている物理的効果が何であれ、その効果を仕上げることになり、したがって、実験結果の解釈にはその意味が含められなければならない、ということ伝える意図が込められている。」

(だから「自発性も創造性もない受動的な反応装置(reactor)を前提にする」実験モデルは「われわれが日常生活で知っているところの人間存在を反映していない」(95頁:p.83)のである。)

私の学校教育相談 (School Counseling Services by Teachers in Japan) あるいはカウンセリングの恩師と呼べるのは、小泉英二先生 (元東京都立教育研究所相談部長、元早稲田大学教授) と小林純一先生 (元上智大学教授、同カウンセリング研究所長) である。両先生は文字通り手取り足取り本当に丁寧に私を導いてくれた。それでもこの40年近く私のこころの中で解決できない問題・課題として残されているものはこの両先生に関わってのことである。何を読んでも、どんな臨床ケースに接しても私の心 (意識) はここに向かってしまうのである。

小泉先生がいつも口にしていた「臨床的な理解」 (その時その時の関わりの理解だけでは危ないですよ) と、小林先生が正確に立論された「人間学的実存的アプローチ」 (カウンセラーである前に同じ人間であるということとはどんなことでしょうね) とは私のこころの中で整合されないままであった。かつては「志向的被存在」 intentional inexistence、現在は「志向性」 intentionality という観念は、「心的現象は、それ自身とは別の対象に向けて、さらにまた反省的行為 reflective act がとられた場合には、それら心理現象自身に向けてさえも、方向づけられている、という事実」 (20頁 pp.17-18) を教えてくれる。私のこの間の経験は下記のフッサールの意味理論で基礎づけられるかも知れない。ただこれだけでは、小泉先生の問いに答え (応え) たことにはならないものと私自身は思っている。

「意識は意味付与行為 **signifying act** を実行する。この行為は意味を確立するが、その意味は充足されることを求める。すなわち、その行為は対象へと方向づけられており、それは、特定の、しかし空虚な、意味を完全に満たすであろう対象である。ひょっとするとその意味を満たしそ  
うだという対象はたくさん在りうる。しかし、その対象がその意味を正確に満たすまで、意識はその正確な解決を求め続ける。」（152頁：p.113）

私は小泉・小林両先生の問いかけに対する「意味充足 **fulfillment**」の意識の旅を続けてきたわけである。率直に言ってただまだ「不満足な **unsatisfactory** 充足」であるので、この旅はまだまだこれからも続くのである。